

希望を耕す

# 超高層建築

東京大学教授・建築学  
**松村秀一**  
Shuichi Matsumura

## 一九六九年の邦画

一九〇八年、大蔵省技師として欧米視察中であつた武田五一は、竣工後間もないシンガー・ビルに上つている。当時世界一だつたこのビルの階数は四七階建て、高さは一八七呎に達していた。武田もさぞ驚いたことだろう。

マンハッタンやシカゴでは、二十世紀初頭から五〇階建てクラスの超高層建築が実現していた。日本でこれに匹敵するような超高層建築が実現するのは一九六〇年代末、アメリカに半世紀遅れてのことだつた。地上三六階建て、高さ一四七呎の霞が関ビルがその第一号と言つて良いだろう。

霞が関ビルの建設については、面白い映画が残されている。一九六九年の『超高層のあけぼの』がそれである。池辺良、木村功、丹波哲郎、佐野周二、中村伸夫、平幹二郎といった男優陣も豪華だが、佐久間良子、新珠三千代の女優陣も当時の内助の功を美しく演じている。クレインのオペレーター役で新人の田村正和が初々しい演技を見せてくれるのも楽しいが、個人的には、東北から出稼ぎに来た作業員役の「バンジューン」こと伴淳三郎が、要所要所で独特の存在

感を示し、比較的単調な展開に得も言われない人間味を与えているのが嬉しい。

この映画は高度経済成長期の建築生産の様子を知る上でも、今となつては貴重なものだが、更に当時このクラスの超高層建築を建てることに、技術的にいかに大変なことだつたかが、手に取るようにわかるところにも価値がある。構造技術者も施工管理者も、部材製造技術者も、そして現場技能者も、それまでにならぬ問題に直面し、それを情熱と信念でブレークスルーして、漸く竣工に辿り着いたことが描かれているのだ。

## 世界中で建てられる超高層建築

『超高層のあけぼの』が公開されてから更に半世紀を経た今日、超高層建築は世界中で建設されている。まるで日常茶飯事のようなペースと数を見れば、建築技術が十分でなさをうな国々でも、ほぼ何の苦労もなく建てられているように見える。あの映画に描かれた日本でのブレークスルーの連続からすれば、実に不思議な現象だ。

そこで、二年程前から日本での初期の超高層建築の設計や施工に携つたことのあるベテラン建築技術者の方々に、その頃の苦労と、今日の

世界中での日常茶飯事的な超高層建築建設についての感想を伺う会を、定期的に持つてきた。

細かな設計や敷地の違いで、その都度技術的に課題になることはあるものの、第一号を経験したら後は大枠ではそれ程難しいことはない。皆さんの経験談を要約するとそういうことになる。施工管理については、足元周りは別として、基本的には基準階平面を繰り返して行くだけなので、そんなに難しいことはなく、むしろ一品ものの大規模空間や、変わった形の建築の施工の方が余程苦労が多いという意見もあった。

確かに、その国の設計者や施工業者がメインで携わっているかどうかは別として、世界中のどこにでも超高層建築が建っている現実からすれば、そういった感想や認識は正しいものなのかもしれない。近代技術というのはそういうものなのだろう。

## 「日本だから」といふこと

あつという間に超高層建築が世界中に広がつたことについて、構造技術者の方からは、日本だけが固有の比較的高度な設計法を用いているが、海外では概ね共通して適用しやすい設計法

を用いていることも関係があるのではないかという感想を伺つた。地震国日本だから初期には独自にブレークスルーすべきことが多かったということだろう。

日本の独自性には誇るべきことも多いわけだが、先に述べたような近代技術の性格、そして日本の平和的な国際貢献の重要性が増している現状を考え合わせると、建築界にも少なからず存在する「日本だから」という事柄の扱いをじっくり吟味すべき時期に来ているように思う。

日本独特なものでローマ字のまま使われている言葉には「TOFU」とか「TATAMI」のような伝統的な生活文化に関わるものが多いが、例えば「UKEOI」「KEIRETSU」「SENPAN」「KANBAN」等、現代社会の仕組みに関わるものも数多くある。最近では「ZANGYO」や「KAROSHI」のような悲しく恥ずかしいものも少なくない。「日本だから」の見直しを、この辺りから始めてみてはいかがだろうか。私も日本ですっかり生きて来年は還暦。そろそろ「日本だから」の吟味をテーマにしようかと思つている。

